

第 13 回受賞選考理由

第 13 回数理社会学会論文賞の対象論文は、規程にしたがい、2019 年 12 月 31 日の時点で数理社会学会の会員であったもの（共著者も含む）が執筆し、2016 年 1 月 1 日から 2019 年 12 月 31 日までの間に『理論と方法』等を含む国内外の学術雑誌で発表された論文であった。対象となる論文から計 7 本が第一次選考を通過し、最終選考では第一次選考を通過したすべての論文について委員が目を通し、議論したうえで、最終的に麦山亮太氏によって執筆された「キャリアの中断が生み出す格差 正規雇用獲得への持続的影響に着目して」（『社会学評論』68 巻 2 号 248～264 頁）を第 13 回数理社会学会論文賞受賞論文として選出した。最終選考で検討された 7 本の論文はいずれも優れた論文であったが、そのなかでも受賞論文は際立って質が高く、当初から委員の間で高い評価を得て、最後は満場一致での選出であった。今回、数理社会学会論文賞選考委員長を担当し、すべての委員が納得しうる結果を得られたことをとても嬉しく思う。

受賞論文のテーマは「職業キャリアに中断が生じたことで、その後のキャリア形成にどのような影響が現れるのかを明らかにする」ことであり、このことを特に正規雇用獲得率に注目しながら分析をおこなっている。論文において使用されたデータは、2005 年社会階層と社会移動全国調査（2005 年 SSM 調査）の職業経歴データである。よく知られているように、SSM 調査の職業経歴データは、回答者の職業経歴について豊富な情報を有している一方で、きわめて複雑な構造をもっており、その分析は決して容易ではない。受賞者は、この 2005 年 SSM 調査の職業経歴データを固定効果ロジットモデル（およびランダム効果ロジットモデル）を用いて詳細に分析し、そこから必ずしも自明とはいえない知見を導出することに成功している。得られた知見にしたがえば、キャリアの中断は一時的に正規雇用獲得確率を低下させるだけでなく、きわめて長期間にわたって正規雇用獲得確率に対してネガティブな影響を与え続けている。このとき特筆すべきは、受賞者は、固定効果モデルを用い個人の異質性を統制したことでキャリアの中断それ自身が正規雇用獲得率に負の影響を与えていることを明らかにした点である。いかえれば、キャリアを中断しやすい人はもともと正規雇用を獲得しにくい人であるからキャリアの中断と正規雇用獲得率が負の関連をもつのではなく（ただし著者の指摘によれば、部分的にはこの説明も成り立つ）、まさにキャリアの中断を体験したことがその後の正規雇用獲得確率を低下させているのである。そのほか、受賞論文では、中断のタイプによってもその後の正規雇用獲得率が異なってくるのが明らかにされている。

受賞論文が選考委員によって評価されたのは、まず実証論文としての完成度の高さである。受賞論文の叙述にはまったく無駄がなく、きわめて明晰で、論理的でもある。また論文で採用されている分析手法も、分析に用いられたデータの特色を最大限に生かすものであり、いたずらに奇を衒ったものとは明らかに異なっている。この点も、印象的であった。さらに得られた知見も、非正規雇用の増大が労働市場に不利を被るものを産み出すだけでな

く、その不利は私たちが考えている以上に長期にわたって残り続け、キャリアを中断したことで生じる格差はリセットされることなく、累積的に拡大していく可能性があることを示唆している。社会的格差を考えるうえで、重要な意味をもつと考えられた。今後の発展可能性についても無視することはできないであろう。非正規雇用が急激に拡大したのは2000年代だが、2010年代になっても非正規雇用は減少していない。受賞論文で分析されたのは、2005年SSM調査データであるが、これを2015年SSM調査データに適用した場合にはどのような結果が得られるのか、気になるところである。

もしかすると、前回に引き続き、計量研究の論文が数理社会学会論文賞を受賞したことに寂しさを覚える会員もいるかもしれない。しかし個人的には、数理社会学の発展という点についてはきわめて楽観的な展望をもっている。今回はたまたま計量研究の論文が数理社会学会論文賞を受賞したが、最近では計算社会科学の台頭もあり、数理社会学研究は廃れているどころか、むしろますます盛んになっているのではないだろうか。この先も、優れた数理社会学の論文が生産され、そして数理社会学と計量社会学は両輪となって社会学の発展を牽引していくことを期待している。そして受賞者には、その一翼を担ってくれることを願っている。

最後に、一次選考を通過した受賞論文以外の6本の論文についても、簡単に感想を述べておきたい。今回はたまたま選から漏れたけれども、最終選考に残った論文はどれも、受賞してまったくおかしくないほどの高い水準に達していた。その点を改めて強調させてほしい。さらに特筆すべきは、最終選考の対象となった論文には海外の一流誌に掲載された論文が複数含まれていたことである。これは数理社会学会会員の活動の国際性を反映しているといってよいだろう。これまでの受賞論文はいずれも日本語で書かれた論文であったが、近い将来、英語で書かれ海外の一流誌に掲載された論文がここに入ってくることを強く予感している。